



TITLE:

<Book review>Guy Hunter, South-East Asia : Race, Culture & Nation, London : Oxford University Press, 1966,xix+190p

AUTHOR(S):

矢野, 暢

---

CITATION:

矢野, 暢. <Book review>Guy Hunter, South-East Asia : Race, Culture & Nation, London : Oxford University Press, 1966,xix+190p. 東南アジア研究 1967, 5(1): 215-216

ISSUE DATE:

1967-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55361>

RIGHT:

(Thai), Jacob (Khmer), Johns (Javanese), Kuiper (Munda), Kähler (Indonesian), Luce (Danaw), Li (Kam-Sui), Lopez 2 編 (Tagalog; Philippine languages), Milke (New Guinea), Milner (Austronesian), Morse (Rawang), Nguyen-Dinh-Hoa (Vietnamese), Okell (Burmese), Pinnow (Munda), Pulleyblank (Sino-Tibetan), Roolvink (Malay), Robins (Sundanese), Shorto (Mon), Simmonds (Tai), Teeuw (Old Balinese), Thompson (Vietnamese), Uhlenbeck (Javanese), Wurm 2 編 (Australian), Zide (Munda).

(三谷 恭之)

“Thai Nooi” (pseud.) *Prasopkaan 34 pii heeng raboob prachaathipatai*. Bangkok: Prae Pittaya, 1965. 664 p.

匿名の政治評論家「タイ・ノイー」の筆はいつになったら衰えるのか。かれの著作の数は、もう30冊になるはずだ。人民党革命の直後から、新聞編集のかたわら、政治評論の仕事を続け、主として Prae Pittaya 書店を発行元に、精力的に書きまくっている。かれの生命力が長いことは、二つのことを物語る。一つは、民衆がかれの評論を支持していることである。もう一つは、「タイ・ノイー」自身が政治の観察と政治評論の仕事に、心から情熱を燃やしていることである。しかし、かれの本名を知っているひとはあまり多くはない。それでいいのだと思う。

本書は、その「タイ・ノイー」の最新の本である。題の意味は、民主主義時代の34年の経験と訳せよう。人民党革命後の歴史、すなわちタイの現代史を、「タイ・ノイー」なりに捉えた本だとすると、それだけで読者の興味をひくことだろう。それともう一つ、もうそろそろタイ人の手になるそのような民主主義時代史が噴出していい頃だから、その先鞭をつける意味でも、本書の刊行は意味深い。

しかし、残念ながら、ある面では、読者は期待を裏切られることだろう。なぜなら、これは、実はかならずしも首尾一貫した歴史の本ではないからだ。この34年のあいだの重要なできごとを、エピソード的に取り上げて解説しているだけの本である。内容の迫力も、かつての力作「10人の総理大臣」にはる

かに及ばない。そして、やはり、サリットの評価はまだ遠慮しているので、興味が半減する。

本書は、それでもいくつかのメリットをもっている。第1のメリットは、フラー・ソン・スラデートの再評価をうながしている点である。ソンは、ピブーンに憎まれた悲運の政治家である。ピブーンによってたいへん悪いイメージを作り上げられてきた。かれがはたして、ピブーンがいうほど悪人であったか、そして、人民党内序列第2位という実力、人民党革命の作戦担当者としての功績などは、改めて高く評価されねばならないのではないか。ピブーン研究の反面に見逃せない人物だけに、本書が、ソンの人となりを描きだすためにかなりのページを割いているのは貴重である。

第2のメリットは、自由タイの正確な評価を試みている点である。自由タイは、たくさんの系列にわかれた地下運動であり、ややもすると、自由タイ運動の全貌が捉えられない傾きにあった。とくに、ネート・ケーマヨティンが自伝風に自由タイ運動を描いてよく読まれたために、かれの描く自由タイ像がすべてと解される傾向も強い。本書が、X-O グループという集団に着目し、チャムカッドという人物の動きを自由タイの中心的系列として追っているのは、その点注目されねばならない。もっともこの点は、タイでは、しだいに常識化しているが、欧米のタイ研究は、まだよく掴んでいない点である。

このような問題提起に接すると、「タイ・ノイー」がタイ政治史の生き字引といわれる事実の正しさをまざまざと感じさせられる。冒頭の、人民党革命が民主化のトレーガーとしては失敗だったということから話を始める芸当も、ただものではできないことだ。一読してけっして損はない本である。

(矢野 暢)

Guy Hunter. *South-East Asia: Race, Culture & Nation*. London: Oxford University Press, 1966. xix+190 p.

本書は、ロンドンの Institute of Race Relations があたらしくはじめた世界民族問題研究シリーズの第1弾である。著者の Guy Hunter は、イギリスでは、アフリカ問題の権威として知られているが、

東南アジアにも半年ほど滞在した経験があるようだ。

とにかくいい本だ。まず、このシリーズの企画自体を高く評価したい。むつかしい理論を前提に新興諸国の問題にアプローチするのではなく、なるべく常識的な感覚で国家の問題を考えようとする姿勢は健全である。最近こんなに興味深い新興国家論を読んだことはない。このシリーズは、このあと、南米、トリニダード、カリブ海諸国、ブラジル、南アジアと舞台を移すという。楽しみである。

本書の内容は、三つの部分にわかれている。第1部では、東南アジアの文化と人種構成が概括されている。第2部では、現在の国家像をつくりあげた後天的要因、たとえば歴史経験、政治行政、教育などの局面が検討される。第3部では、現代における問題点がひとつとおり議論され、157ページからはじまる結論部は味わい深いものである。

著者の東南アジアでの経験は少ないが、この本の内容をみると、一級の専門家であることがわかる。それというのも、かれがイギリス人であり、イギリス人のすぐれた学者がみなもっているすぐれた現実感覚をもっているからだろう。無駄な理屈をこねない英国流の堅実な学風が、本書に安定した生命感を与えている。本書は、一行一行が味わいをもち、それだけに読むのが難しい本でもある。随所にころがるなげない断定が、一つ一つ問題をもっている。

新興諸国の政治については、アメリカの学者がむつかしい理論的研究を続けてきているが、かれらの才気走った理論に食傷したときに、このような本を読むとせいせいする。イギリス人学者の書いたこのような本には、学問の正しいあり方を暗示するなにかが秘められている。アメリカ流の社会科学は、論理的に突きつめるとどこまで行きつくのかわからない点に、不安を感じさせる。しかし、イギリス流の社会科学は、どこまで行っても、けっして不毛の非人間的な究極には行きはしないという保証がある感じで、やすらぎを覚えるから不思議だ。しかし、この点はだいたいなことだと思う。

わたくしは、一読して、この本をたんなる民族問題の本だとは思えなかった。その枠を越えて、むしろ新興諸国の本質に問題点、すなわち、国民国家形成の問題とナショナリズムの問題を主題にしている感じだ。新興諸国のナショナリズムについて書かれ

た本はこれまで何冊かあったが、社会学的に、生きた現実のダイナミズムとしてのナショナリズムの生成要因を扱った、実証的な研究に乏しかったように思える。そのためには、ナショナリズムの理念史的研究ではなくて、Karl Deutsch が提案した“social communication” 概念ととりくまねばならない。

この本は、あいまいな形でではあれ、そのような問題意識に立っていると思う。もっともイギリス人の常識といってしまうとそれまでだが、アメリカの学者に欠けているなにかを Hunter が示していることは事実だ。それをわたくしは、たいへん貴重に思うのだ。  
(矢野 暢)

Hugh Tinker. *Reorientations, Studies on Asia in Transition*. London: Pall Mall Press, 1965. 175 p.

ビルマの専門家として名高い著者の最初の評論集である。いつもの密度の高い研究書と趣きが違い、軽く読める本になっている。それでいて、本書を読んで学ぶ事柄はけっして少なくはない。一つ一つの論文が、それぞれ南アジア、東南アジアのだいたいな問題を扱っているので、全体としてまとめると、アジア問題の貴重な参考書になっている。それよりもまず、かれのこれまでの本ではなかなかつかめない Tinker のアジア観がはっきりわかるのはうれしい。かれはすばらしい政治感覚の持ち主のようだ。

全部で10編の論文が収められている。第1の論文“History in a Time of Transition”では、西欧の歴史学者とアジアの歴史学者とが「意見を異にする協定」を結べと提案している。第2の論文“The City in Asia”では、アジアの後進地域において都市が果たす役割が扱われている。都市の機能を政治学の研究課題にせよと提案し、同時に、東南アジアの都市が、社会機能を独占しすぎるのはよくないといっている。第3の論文“Community Development, A New Philosopher's Stone”では、地域開発という事柄がアジアでは魔術のような魅力をもつ事実が指摘される。これは、欧米の歴史に先例のない面白い実験だが、民衆の自発性を抑圧する傾向にあるのはよくないと断じている。第4の論文“Climacteric in Asia”では、40年代、50年代そ